命のろうそく　　広島県

むかし、あるところに、仲のよい働き者の兄弟がいました。いつもふたりで、一生懸命、家の仕事をしていました。

あるとき、兄さんが、ふとしたことで、大きな病気にかかってしまいました。お医者の手にもあまるほどひどくなって、弟は、神さまや仏さまにすがって、「どうぞ助けてやってください」と祈りました。

とうとうある晩、兄さんは、明日をも待てないようになりました。弟は、看病につかれきって、兄さんの枕元で、うつらうつら居眠りをしてしまいました。すると、どこからか、声が聞こえました。

「助けてやりたいから、知恵を使え。明日の晩、天からはしごを下ろしてやる」

弟は、はっと目が覚めました。

「兄さんに良くなってほしいあまり、たよりのないゆめを見たなあ」と、弟は思いました。

つぎの日の夕方、ほんとうに、天からはしごが下がって来ました。

「ゆめじゃなかった。知恵を使えといわれたが、まずはこのはしごを登らなくては」

弟は、はしごを登って行きました。どんどん登って行くと、きれいな部屋にたどり着きました。むこうのとびらの前に、大きな赤鬼が、いびきをかいて寝ていました。

「知恵を使えということだが、ここを通りぬければいいのだな」

弟は、赤鬼が目を覚まさないように、そうっととびらを開けて、つぎの部屋に入って行きました。

つぎの部屋にもとびらがあって、また大きな鬼がいびきをかいていました。弟は、

「こう鬼ばっかりおったんでは、たまらん」と思いながら、そうっととびらを開けてつぎの部屋に入って行きました。

つぎの部屋には、一面に、ろうそくが立っていて、赤あかと輝いていました。よく見ると、長いのや短いのや、どのろうそくにも、名札が付いています。

「これはどういうことかしら」と考えながら、見て行くと、友達の名前の書いてあるろうそくがあって、赤々と灯っていました。ところが、短くて、とぼとぼと消えそうなろうそくがあります。それは、年とったおじさんのろうそくでした。弟は、はっと気が付きました。

「これは、命のろうそくだ」

弟は、急いで兄さんのろうそくをさがしました。すると、まだ長いけれども、横に倒れて今にも消えそうなろうそくがありました。名札に、兄さんの名前が書いてありました。弟は、そのろうそくを、しゃんと立ててやりました。すると、また炎が上がりました。

弟は、自分や親や友達のろうそくをしっかり立て直して、部屋を出ました。とびらの前では、やはり鬼が寝ていました。その鬼の側を通りぬけ、つぎの鬼の側も通りぬける

と、弟は、家の前にいました。兄さんは、もう起きて、仕事を始めていました。
それからふたりは、元気でせっせと働いて、大金持ちになったということです。

原話：『奥備中昔話集』稲田浩二・立石憲利編／三弥井書店
再話：村上郁